

雨の季節だ。日本語には、雨にまつわる言葉が千以上ある。梅雨に換わる言葉も微雨(ばいう)、麦雨(ばくう)、五月雨、黄梅の雨、

フリー便り 風 (現場)からの風

宮田 守男

と多様で、この季節に降りかかる雨を「青葉雨」と呼び、したたり落ちる水滴を「青葉時雨」と呼び、草木を青み、花を咲かせる雨として「雨に花の父母」など、生活には無くてはならないものだと親しんだ。日本の1年間の平均降水量は約1700ミリで世界平均の2倍にもなり、それゆえ喜らしに身近で、昔も今も自然を感じる瞬間だと京都新聞コラム「梵語さんが紹介した。」

定区域図」を公表した。池田町では流域の平地全域が50%以上浸水する可能性を示した。この災害発生の危険を大内では低気圧や前線に向かって暖かく湿った空気が流れ込んで大気が不安定になり、一時

激しい雨が降りJR大糸線は始発から運転を見合せた。昨年の台風19号災害からまだ8ヶ月。昨年10月、県は高瀬川流域で48時間に「千年に一度」級の741ミリの大雨が降る場所を想定した「浸水想

めに避難できる想定を機会あるごとに確認してほしいと願っている。

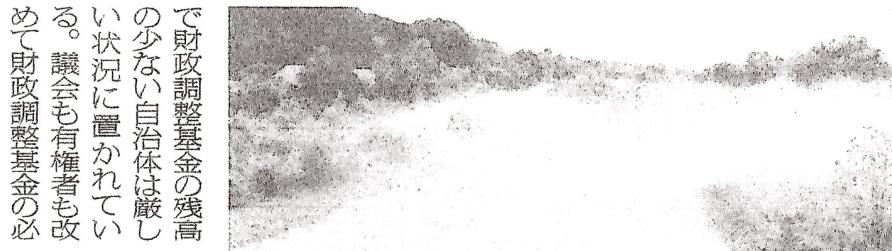
新型コロナウイルス感染拡大などの影響で被災対策として、各自治体は独自の支援策を示しているが、各自治

度末8億7300万円の財政調整基金が新型コロナ対策費用などを取り下し残高が1億円まで減少して危機的な状況だと、早急な財政再建に着手したいと答弁した。

身近な自治体の財政運営を考える事も大切だ

体の対応の差に疑問の声が聞こえてくる。東京都は新型コロナ対策で「財政調整基金」を95%近く取り崩し、残高はおよそ500億円の見通しで、税収が減ることも予想する中で今後の財源確保が課題

「財政調整基金」は、自治体が財源に余裕がある年に積み立て、不足する年に取り崩すことで財源を調整して、計画的な財政運営を行うための貯金だ。今回の感染症の対応はやむを得ない理由での対応だが、積極的な財政運営や度重なる災害対応



激しい降雨で姫川が激流に変貌、今年も災害を心配してしまう

要性を考えてみると、な機会になつたに違いない。(NPO法人信州地域社会フォーラム会員)

で財政調整基金の残高の少ない自治体は厳しい状況に置かれている。議会も有権者も改めて財政調整基金の必